

# 「大丈夫ですね」の使用に関する実態調査

—— 情報のなわ張り理論を用いた分類から ——

芦木 亜彩湖

## 1. はじめに

「大丈夫」の用法については、砂川（2005）をはじめ、多様なアプローチで研究されている。使用の拡大を指摘するものや、アンケート調査を用いて使用の意識を調査したものなど、研究内容も多岐にわたる。しかし、実際にはどのような用法が用いられているのか、実態調査は見られない。そこで、芦木（2019）では、筑波ウェブコーパス（以下、「TWC」とする）を用いて「大丈夫です。」ならびに「大丈夫ですよ」の実態調査を行った。本稿では、芦木（2019）と同じく、TWCを用いて、「よ」と同じく終助詞である「ね」を用いた、「大丈夫ですね」の実態調査を行う。

## 2. 先行研究

本章では、4節に分けて先行研究を確認していく。第1節では、「大丈夫」に関する先行研究を、第2節では、「大丈夫」に関する先行研究の問題点を記す。第3節では、終助詞「ね」に関する先行研究を、第4節では終助詞「ね」に関する先行研究の問題点を記す。

### 2-1. 「大丈夫」に関する先行研究

「大丈夫」に関する先行研究は、比較的少ないのが現状である。管見の限り、「大丈夫」の使用に関する問題提起は、砂川（2005）が最も古いようである。「問題ない」という辞書の用法から外れた用法について述べ、「大丈夫」の使用の拡大を指摘している。

その後、城田（2007）が、「大丈夫」に関する使用のアンケート調査を行っている。続いて、山下（2013）、高橋・竹下（2014）、尾崎（2016）が、ポライトネスや配慮表現という視点から、アンケート調査を行い、「大丈夫」の用法に関して考察している。

さらに、川口（2017）は、以下のような用法について考察している。

- (1) 冒頭に紹介した「今晚、一杯飲みに行くか?」という「誘い」は、相手に対する話者の「懸念」を示すというより「気遣い」を示すものとして捉えられる。このような誘いを「大丈夫です」と言って断るのは、相手が示した「気遣い」に対して「そのように気遣っていただかなくても大丈夫です」、つまり、「どうぞお気遣いなく」と言って丁寧に断ろうとする配慮表現であると言える。 (川口 2017 : 53)

このような「断り用法」について、配慮表現の観点から考察しており、大変興味深い。

また、菊池（2018）は、「大丈夫」の用法について、日本語母語話者、ならびに日本語学習者にアンケート調査を行い、その違いについて考察している。

「大丈夫」に関して、最も新しい論文は、遠藤（2020）である。「大丈夫」を機能別に分類し、アンケート調査を行い、教科書での使用に関しても調査をしている。さらに、勧誘に対する断り用法にも触れている。

なお、「大丈夫」の機能分類に関する研究に、「『大丈夫』をめぐる考察」（竹下 2014）もあるようだが、修士論文のため、残念ながら確認することができなかった。

以上が、「大丈夫」に関する先行研究である。ただし、上記は全て研究論文であり、雑誌記事や投書などは含まれていない。紙幅の都合上、具体的な紹介は割愛するが、実際には、インターネット上の記事や雑誌、新聞の投書、Yahoo! 知恵袋でも、「大丈夫」の用法に関して、疑問や問題提起がされている。なお、2018年までの記事等は、芦木（2019）に引用しているため、参照されたい。

## 2-2. 「大丈夫」に関する先行研究の問題点

先行研究では、主にアンケート調査を用いて、「大丈夫」の用法を考察している。調査から、「大丈夫」の使用頻度や、使用に関する意識を考察している研究が多い。そこで、芦木（2019）では、TWCを用いて実態調査を行った。

実際に用いられている「大丈夫」の用法は、どのようなものが多いのかを明らかにしたいと思い、まずは、「大丈夫です。」と、「大丈夫ですよ」に絞って調査した。

管見の限り、コーパスを用いた「大丈夫」の調査は確認出来なかった。しかし、実例を見て、「大丈夫」の用法の実態を把握することは、極めて重要であり、研究意義があると考えられる。

そのため、本稿では、芦木（2019）に引き続き、TWCを用いて実態調査を行う。本稿の研究対象は「大丈夫ですね」である。前述の通り、芦木（2019）では、「大丈夫です。」と、「大丈夫ですよ」を取り上げた。したがって、次の研究対象として、「よ」と同じく終助詞である「ね」に着目した。

### 2-3. 終助詞「ね」に関する先行研究

「大丈夫ですね」を考察するにあたり、まずは、終助詞「ね」に関して、どのような先行研究があるのかを調べた。終助詞「ね」に関しては、現在までに数多くの先行研究が存在する。したがって、ここでは代表的なものを挙げるに留める。大曾（1986）や、益岡・田窪（1989）は、話し手と聞き手の知識の一致を「ね」の使用条件としており、「同意」「同意要求」「確認（要求）」といった用法を提示している。

「ね」の基本的な機能は、現在でもこの説が有力であり、日本語学習者の教科書でも、この説に基づいて、「ね」が用いられている。

また、蓮沼（1988）では、「ね」の基本的な用法を、「発話時において自分が述べようとしていることと、他の何らかのよりどころとなるものとの間に、食い違いがないということ、話し手が話の場に持ち出し確認する。」（蓮沼 1988：95）と定義し、以下のような用例を用いて、「内部確認用法」を提唱している。

(2) A：理想の女性は？

B：やっぱり、しとやかで優しい女<sup>ひと</sup>ですね。 （蓮沼 1988：94）

上記の用例の場合、AはBの発話を聞くまで、共有情報を持っているはずがない。蓮沼（1988）は、(2)のような用例を内部確認用法とし、用法を以下のように説明している。

(3) 自己の内部知識、記憶といったものに照らして、今述べていることが

確かにそうだとすることを、話し手が確認しつつ発言しているといったプロセスが読み取れるが、それを示しているのが、他ならぬ「ね」だと考えられる。(蓮沼 1988: 95)

さらに、岩畑 (2009) は、上記の用法に加え、新たに「依頼・勧誘」や「感嘆」、「拒否・拒絶」等の用法を加えて提示している。

日本語教育の観点からの研究も数多く存在する。山内 (2009) は、『みんなの日本語』で扱われている終助詞を明らかにし、その出現頻度をまとめている。その上で、「ね」は初級の段階から多く使用されていることを明らかにし、初級から力を入れて教えるべきであると提言している。

西郷 (2012) では、談話完成タスクを用いて、日本語学習者の実例を考察している。その結果、「ね」は相手の同意を経て提案を促す終助詞であることを明らかにした。その上で、日本語教育において、単純な意味機能の説明だけではなく、何のために「ね」を用いるのかといった、方略的使用の視点に立った説明が重要であると述べている。

また、「ね」は日本語学習者にとって習得が難しいとされており、カザフスタン語と比較した研究である、ラヒムバエヴァ (2017) や、中国語の教科書で終助詞がどう扱われているか、また、中国語母語話者の終助詞の誤用について研究した顔 (2013) 等が確認出来る。

さらに、心理学からのアプローチもある。福島・岩崎・渋谷 (2008) では「ね」は受容性に関係する終助詞であり、「やわらかい」「親しみやすい」「感じの良い」「暖かい」といったイメージが見られると述べている。

本稿で特に参考にしたのは、神尾 (1990、2002) の、情報のなわ張り理論である。話題となる情報と、話し手および聞き手の間に、心理的距離が存在するとし、その距離を、<近>と<遠>で測定する。<近>は、情報のなわ張り内を、<遠>は、情報のなわ張り外を意味する。測定において、1は「完全に知っている」を、0は「全く知らない」を意味する。さらに、ある情報において、その情報をよく知っている場合と、確信が持てるほど知らない場合とがあり、その境界を  $n$  としている。情報をよく知っている場合は、なわ張り内、あまり知らない場合は、なわ張り外に分類されるため、 $n$  は情報のなわ張りの境界と考えられる。

神尾 (2002) では、「ね」について、以下のようにまとめられている。S は話し手を、H は聞き手を表わす。

- (4) 必須の「ね」 :  $H=1$   
 任意、強調の「ね」:  $H>n\&S>n$   
 任意、疑問の「ね」:  $H>n\&S<n$   
 任意の「ね」 :  $H<n\&S \geq H$  (神尾 2002 : 75)

必須の「ね」とは、「ね」を取り除くと不自然な用例を指す。例えば、以下の様な例である。

- (5) S : 今日はいい天気ですね。  
 H : そうですね。 (朴 2018 : 17)

任意の「ね」とは、「ね」を取り除いても自然な用例を指す。例えば、以下の様な例である。

- (6) H : このお肉、いくらですかね ?  
 S : えーと、それは、250 円ですね。 (神尾 2002 : 73)

以上に示した、情報のなわ張り理論をもとに「ね」を考察したのが、朴 (2018) である。朴 (2018) については、次の第 4 節で詳しく述べる。

#### 2-4. 終助詞「ね」に関する先行研究の問題点

朴 (2018) は、終助詞「ね」に関する先行研究に関して、非常に重要な指摘を行っている。それは、第二言語習得における「ね」の習得研究は、研究によって機能分類が異なるため、複数の研究結果を比較しにくいという指摘である。さらに、各機能における「ね」の説明が不足しているため、研究によっては「ね」の分類にゆれが生じる可能性についても指摘している。

そのため、朴 (2018) では、「ね」を客観的に分析するため、神尾 (1990、2002) を用いて「ね」の用法を再分類している。氏が提唱した「情報のなわ張り理論」は、話題となる情報がどこにあるかという観点から、「ね」を客観的に分析しており、分類上のゆれを防ぐことができる、という理由による。

朴 (2018) の指摘は示唆に富んでおり、学ぶところが多い。「ね」の研究は、「同意」「同意要求」「確認要求」を基本としながら、その3つの用法では説明できない用例を提示し、新たな用法を付け加えるものが散見される。前述の蓮沼 (1988) も、内部確認用法という新たな用法を提示しており、岩畑 (2009) も、

数多くの用法を提示している。

本稿の目的は「大丈夫ですね」の実例の分類であるが、朴（2018）が指摘した通り、用法ごとに分類しようとすると、ゆれが生じるおそれがある。これが、終助詞「ね」に関する先行研究の問題点である。以下に、TWCの用例を用いて具体的に述べる。

(7) A：そんな美しい自然をバックにですね、珠洲も先程のキリコがですね、メインになってくるお祭りが豊富なんです。特にこれからのシーズンはですね、毎日どこかで、そのキリコを使ったお祭りが開かれていてという感じなんですよ。

B：いつ行っても大丈夫ですね。じゃあ、ね。

A：いつ行っても大丈夫です。

(TWCの用例に、話し手と聞き手を明確にするため、「A：」、「B：」と筆者が追記した。)

(7)は、「いつ行っても大丈夫」ということの「確認要求」と考えられるが、Aが「いつ行っても大丈夫です。」と、同意を示しているため、「同意要求」とも考えられる。用法ごとの分類は、このようにゆれが生じてしまう。

では、情報のなわ張り理論を元に、(7)を考えてみたい。A（聞き手=H）は話題となっている祭りについてよく知っており、B（話し手=S）に祭りを紹介している。「いつ行っても大丈夫」という情報についてもよく知っているため、 $H=1$ となり、必須の「ね」に分類される。

このように、用法ごとの分類は、ゆれが生じるおそれがあるが、情報のなわ張り理論を用いると、客観的に用例を分類することが出来る。

しかし、情報のなわ張り理論を用いても、分類基準を定めるにあたり、客観性に問題が生じたのだが、それについては第4章で後述する。

### 3. 研究課題

本章では、第2章で明らかにした先行研究の問題点を踏まえて、研究課題を定める。本稿の研究課題は以下の通りである。

(8) 本稿では、先行研究で明らかにされていない「大丈夫ですね」の実例を、情報のなわ張り理論を用いて分類し、「大丈夫ですね」の使用実態を概

観することを研究課題とする。

まず、第2章第2節でも述べたように、「大丈夫」に関する先行研究は、「大丈夫」の使用に関する意識調査等が多い。先行研究では実例を用いた実態調査が行われておらず、実際にどのような用例が用いられているのか把握出来ていない。

しかし、使用の拡大が指摘されている「大丈夫」の実態を概観することは、大きな研究意義がある。

したがって、本稿では「大丈夫ですね」を対象に、TWCを用いた実態調査を行う。

さらに、分類基準を考えるにあたり、終助詞「ね」に関する先行研究を確認した。終助詞「ね」に関する先行研究は、用法に着目した研究が中心であったが、用法ごとの分類はゆれが生じるおそれがある。したがって、客観的に分類出来ると思われる、情報のなわ張り理論を用いて分類することを定めた。

#### 4. 分類基準

第3章で定めた通り、本稿では情報のなわ張り理論に則って実例进行分类する。同じくTWCを用いて実例进行分类した、芦木(2019)では、以下のように分類基準を決めた。

- (9) 【依頼に対する承諾】
- 【許可求めに対する承諾】
- 【勧誘に対する承諾】
- 【勧誘に対する拒否】
- 【勧めに対する拒否】
- 【申し出に対する拒否】
- 【可能形の問いかけに対する肯定】
- 【諾否疑問文に対する肯定】
- 【諾否疑問文に対する否定】
- 【言いさし】
- 【その他】<sup>(1)</sup>

芦木(2019)では、用例を全数調査した上で、応答表現のみを対象とし、上

記の用法ごとに分類した。翻って、本稿では、情報のなわ張り理論に則って分類するため、応答表現以外も分類対象とする。したがって、芦木（2019）の分類基準は適用出来ないため、新たに分類基準を設けた。以下に示す。

(10) 本稿では、以下に当てはまる用例を分類の対象とする。

任意の「ね」( $H < n$  かつ  $S \geq H$ ) であることが明らかな用例

H は聞き手を、S は話し手を表す。H < n は、聞き手がなわ張り外であることを表し、 $S \geq H$  は、S が H と同等、もしくは H 以上に、話題となる情報について知っていることを表す。

(10) を定めるにあたって、TWC の実例をもとに考察を行った。以下に、具体例を挙げながら、分類基準を定めた過程を詳細に記す。

(10) に当てはまる用例は、以下のようなものがある。

(11) A : 朝からですよ。大変ではないですか？

B : 慣れれば全然大丈夫ですね。普通の部活と同じくらいですね。

(TWC の用例に、話し手と聞き手を明確にするため、「A : 」、「B : 」と筆者が追記した。)

(11) は、とある部活についてのインタビューだが、A は、朝から練習することについて、「大変ではないですか？」と、質問している。それに対し、B は「慣れれば全然大丈夫ですね」と、応答している。この用例では、明らかに、A は B の持つ情報を持っていない。したがって、A はなわ張り外にいる。

当然ながら、B が「慣れれば全然大丈夫」ということを、A は、B の発言を聞くまで知らない。つまり、 $H < n$  が成り立つ。そして、B は自分のことなので、当然 A よりも情報をよく知っており、 $S \geq H$  が成り立つ。この場合、「ね」は任意要素である。

神尾（1990）では、任意の「ね」について、以下のように述べている。

(12) 話し手が自己の発話により特に協応的態度を表現したい場合、話し手の発話は「ね」を伴うことが出来る。 (神尾 1990 : 77)

ここでいう「協応的態度」とは、「与えられた情報に関して話し手が聞き手に同一の認知状態を持つことを積極的に求める態度」(神尾 1990 : 71) のこと

である。神尾（1990）において、「ね」は、「話し手の聞き手に対する〈協応的態度〉を表わす標識である」（神尾 1990：71）と、定義されており、(12)の条件を満たす際に、「ね」は任意要素となる。

また、朴（2018）では、任意の「ね」として、内部確認用法を分類している。(11)の用例は、まさに内部確認用法そのものだと言えるだろう。このように、情報がどちらのなわ張り内に存在するのかを考えれば、客観的に分類出来るのではないだろうか。

しかし、ここで一つ問題がある。TWCで確認された、以下の用例を見ていただきたい。

- (13) おはようございます。八幡宮の蓮のお花見られなくて残念ですね。でも来年は大丈夫ですね。リハビリ頑張ってくださいね。

(13)は、ブログのコメントの抜粋で、正確な会話の流れは不明であった。しかし、話し手の発言から、聞き手が病気のリハビリ中で、今年は蓮の花が見られなかったことが察せられる。話し手が「来年は大丈夫ですね」と発言しているが、この場合の「ね」が必須なのか任意なのかは、聞き手の情報に関する話し手の想定によって変わるだろう。

まず、話し手が、聞き手も話し手と同じくらい、「来年も大丈夫である」と確信している、と想定している場合は、必須の「ね」になるだろう。この場合、以下のような会話が想定できる。

- (14) A：今年は蓮の花が見られなくて残念でしたが、来年は必ず見られると信じています。  
B：八幡宮の蓮のお花見られなくて残念ですね。でも来年は大丈夫ですね。ね。リハビリ頑張ってくださいね。

この場合、AもBも「来年は大丈夫だ」という共通認識がある。つまり、A（聞き手）も、B（話し手）も、「来年、Aは花を見られる」という情報を、自己のなわ張り内に持っている。したがって、 $H=1$ が成立する。

しかし、聞き手が悲観しており、来年、花が見られるかどうか分からない、というような発言をしていた場合は、任意の「ね」になるのではないだろうか。例えば、以下のような場合である。

(15) A : 今年は蓮の花が見られませんでした。来年も見られるかどうか分かりません。来年までに病気が治らないかもしれません……。

B : 八幡宮の蓮のお花見られなくて残念ですね。でも来年は大丈夫ですね。リハビリ頑張って下さいね。

この場合、以下のような会話でも自然である。

(16) A : 今年は蓮の花が見られませんでした。来年も見られるかどうか分かりません。来年までに病気が治らないかもしれません……。

B : 八幡宮の蓮のお花見られなくて残念ですね。でも来年は大丈夫です。リハビリ頑張って下さいね。

(16) では、B が、病気を悲観している A を励ます意図で、「大丈夫です」と発言していることが推測出来る。「来年は大丈夫」という認識を、A (聞き手) よりも、B (話し手) が強く持っている、あるいは、B のみが持っているということである。この場合、A は情報のなわ張り外にいると考えられる。したがって、 $H < n$  ならびに  $S \geq H$  が成立する。

以上のように、(13) においては、話し手の想定によって、必須の「ね」に分類出来る場合と、任意の「ね」に分類できる場合があり、分類にゆれが生じてしまう。したがって、本稿では (13) のような用例は分類の対象としない。

また、神尾 (2002) では、任意の「ね」について、以下のような説明をしている。

(17) この種の「ね」が実際には  $H < n$  の状況であるにもかかわらず、あたかも  $H > n$  が成立しているかのように話しかけるための要素であることを意味する。  
(神尾 2002 : 77)

(16) の用例に立ち返って考えると、 $H < n$  なので、A は「大丈夫」ということを自己のなわ張り内に持っていない。つまり、病気を悲観し、来年までに治るとは思っていない。しかし、B は、A も  $H > n$  だと想定して、あたかも相手が「大丈夫」だと思っているかのように振舞っている。

なお、神尾 (2002) では「ずい分、ひどい奴らしいね。」という例を挙げて具体的に説明しているが、この点は田窪行則氏の示唆に負う、と述べている。

以上のように、情報のなわ張り理論を用いても、「大丈夫ですね」を客観的

に分類するのは困難が伴う。言うまでもないが、分類においては、再現性が最も重要である。誰が、いつ、どこで分類しても同じ結果にならなければ、科学的ではない。再現性を保証するため、なるべく客観的な分類基準を定めた。それが、前述の(10)である。以下に再掲する。

(10) 本稿では、以下に当てはまる用例を分類の対象とする。

任意の「ね」( $H < n$  かつ  $S \geq H$ ) であることが明らかな用例  
(再掲)

必須の「ね」と比べて、任意の「ね」であれば、情報の所在が明らかで、客観的に分類出来ると考えた。

## 5. 分類方法

本章では、用例の分類方法について記す。TWC に収録されている「大丈夫ですね」の用例全 239 例を、2 通りの方法で分類する。以下に、その方法を示す。

(18) 分類 1：全用例を、「大丈夫ですね」に前接する形態素ごとに分類する。

分類 2：任意の「ね」( $H < n$  かつ  $S \geq H$ ) であることが明らかな用例を、前接する形態素ごとに分類する。

形態素とは、意味を担う最小単位である。形態素ごとに機械的に分類することで、客観性を担保出来る。また、分類 1 では、全用例を分類出来るため、「大丈夫ですね」を概観することも出来る。なお、副助詞は「とりたて助詞」として分類した。

分類 2 では、第 4 章で定めた分類基準に従って、任意の「ね」に当てはまる用例のみを前接する形態素ごとに分類し、分類 1 と比較検討する。

## 6. 調査結果と考察

第 4 章で定めた分類基準と、第 5 章で定めた分類方法に基づいて、用例を分類した。以下の表 1 に、分類 1 の結果を示す。<sup>(2)</sup>

表 1. 分類 1 (全用例の分類)

	ても	は	ば	もう	ので	前接なし	でも	なら	で	その他	計
用例数	37	35	22	21	15	13	13	12	11	60	239
割合	15%	15%	9%	8%	6%	5%	5%	5%	5%	25%	100%

用例が多数あるため、用例数が一桁の用例は全て「その他」に分類した。<sup>(3)</sup>  
表 1 から、接続助詞「ても」が最も多いことが分かる。「ても」は、239 例中 37 例であり、全体の約 15% を占めている。具体的な用例を以下に示す。

- (19) 確かに資金管理をしっかりすれば、そんなに心配しなくても大丈夫ですね。
- (20) ゴーグル着用が義務なら、コンタクトしたまま泳いでも大丈夫ですね？

次に多いものは、とりたて助詞「は」であった。239 例中 35 例であり、全体の約 15% を占める。具体的な用例を以下に示す。

- (21) 来年度の調査の方については対応して下さることになるわけですね。  
ここは大丈夫ですね。
- (22) まずは、このプリントを例にとって、説明していきます。文章の打ち方は大丈夫ですね？

3 番目に多いものは、接続助詞「ば」であった。239 例中 22 例であり、全体の約 9% を占める。具体的な用例を以下に示す。

- (23) では、発災しても自宅が少しでも居心地がいいように備え、その前に最低限、大怪我をしなければ大丈夫ですね。
- (24) 飲んでおられる方の中には、「先生、これを毎日飲んでいれば大丈夫ですね」とおっしゃる方も少なくありません。

4 番目に多いものは、副詞「もう」であった。239 例中 21 例であり、全体の約 8% を占める。具体的な用例を以下に示す。

(25)では時間変化です。[s]となります。これはもう大丈夫ですね。

(26)ではさっそく銀行口座 (bank account) を開く (open する) ために銀行へ行ってみましょう。最寄りの支店 (branch) がどこにあるかはもう大丈夫ですね。

以上から、「大丈夫ですね」という用法に前接する形態素は、「ても」「は」「ば」「もう」で半数近くを占めていることが分かった。

次に、分類2を行った。調査の結果、任意の「ね」に該当する用例は、239例中42例であった。以下の表2に結果を示す。<sup>(4)</sup>

表2. 分類2 (任意の「ね」に該当する用例の分類)

	ても	は	前接なし	全然	でも	ので	ば	で	もう	その他	計
用例数	7	6	5	3	3	2	2	2	2	10	42
割合	17%	14%	12%	7%	7%	5%	5%	5%	5%	24%	100%

用例数が1の用例はその他の用例に分類した。<sup>(5)</sup>

表2から、接続助詞「ても」が最も多いことが分かる。割合も全体の約17%と、多少の差はあるが、表1の結果とほとんど同じと言える。具体的な用例を以下に示す。

(27) 本当は映像があったほうが作りやすかったりするんですか？

佐藤 テレビの場合は映像がなくても大丈夫ですね。

(28) 「信じていただけるかどうか分かりませんが、特に女性の方が縦の木の家に住むと間違いなく肌ツヤが良くなります」と…。(中略) 「そう言えば、私はすごく乾燥肌でいつも保湿クリームをいっぱい使っていましたが、今は使わなくても大丈夫ですね」と。

次に多いものは、とりたて助詞「は」で、全体の約14%を占める。これも、表1の結果とほとんど同じと言えるだろう。具体的な用例を以下に示す。

(29) 四日市から中2日だけど、疲れは昨日まで。今日は大丈夫ですね。

(30) うちの娘が今2歳半くらいなんですけど、もうだいふ前にやめてます。ま、でも、ちょっとたまに、ふとしたことで、ちょっとこんなんしてることはありますけど。その程度は大丈夫ですね。

3番目に多かったものは、前接する形態素が何もない、「前接なし」の用例である。全体の約12%を占めている。表1では約5%であったので、はっきりした差が見られると言えるだろう。具体的な用例を以下に示す。

- (31) 診察室を出て、病院の前の道路を歩いてみました。先生も一緒に出てきてくれて、様子を確認して下さったんですが普通に歩いてたので、「大丈夫ですね」と。
- (32) 友人の内科の先生が来て何をするかと見ていたら、バイタル、熱、血圧、脈を取って、「大丈夫ですね。薬はちゃんと入れていますか」という状態で帰っていきます。

「前接なし」に分類した用例は、上記のような、目視確認して、「大丈夫ですね」と判断する用例が多く見られた。このような用例は病院での場面が非常に多く、5例全てが病院での用例であった。

(31) や (32) の用例において、患者は明らかに  $H < n$  である。さらに、患者よりも医師の方が情報に  $< 近 >$  であるため、 $S \geq H$  が成立すると考えられる。したがって、任意の「ね」と考えて問題ないだろう。

任意の「ね」は、協応的態度を特に表す終助詞である。協応的態度とは、「与えられた情報に関して話し手が聞き手に同一の認知状態を持つことを積極的に求める態度」(神尾 1990 : 71) である。

「前接なし」に分類された用例は、全て、医師(話し手)と患者(聞き手)の会話である。「大丈夫」であることを、医師(話し手)が認知し、患者(聞き手)にも認知させるために、任意の「ね」が用いられているのであろう。

また、表1では上位に見られた接続助詞「ば」や副詞「もう」は、表2ではあまり見られず、代わりに、副詞「全然」が4番目に多く用いられており、上位であった。「全然」は、全239例中5例である。全体に占める割合は約2%程度と、ごく僅かではある。しかし、その中で、任意の「ね」として用いられている用例は5例中3例であり、半数以上を占めている。3例全てを以下に示す。

- (33) ——大学から始めても大丈夫ですか  
祖父江 全然大丈夫ですね。問題ないです!!
- (34) ——朝からですよ。大変ではないですか?  
慣れれば全然大丈夫ですね。普通の部活と同じくらいですね。
- (35) お腹を壊しそうというのは東南アジアなどを指してると思いますが、

自分は全然大丈夫ですね。

上記の例も、他の用例と同じく、「問題ない」という辞書的用法である。特に、(33)では、「全然大丈夫ですね。」の後に、「問題ないです!!」と、続いている。(33)から(35)の用例にも、話し手が「大丈夫」ということを認知し、聞き手にも同じ認知状態を求める、協応的態度が見られる。

(33)と(34)は、自身の所属する部活動について説明している用例である。部活動を行う上で、「全然問題ない」ことを示すために、協応的態度を表しているといえる。

用例を分析していく中で、辞書的用法とは異なる用例もTWCで確認できたので、以下に示す。

(36) ——ちなみに芦名さんは人の心を読む能力はほしいですか？

いやあ、私は大丈夫ですね。「10分体験、人の心を読む」とかだったら、勇気を持って体験したいと思いますけど、一生与えますといわれたらちょっと…(笑)。

この用例では、「人の心を読む能力はほしいですか？」という質問に対しての返答なので、「問題ない」という辞書的用法を直接当てはめることはできず、言外の気持ちを補足する必要がある。この用例に補足を付け加えると、以下のようになるだろう。

(37) ——ちなみに芦名さんは人の心を読む能力はほしいですか？

いやあ、私は(その能力がなくても)大丈夫ですね。「10分体験、人の心を読む」とかだったら、勇気を持って体験したいと思いますけど、一生与えますといわれたらちょっと…(笑)。

上記のような補足があれば、「その能力がなくても問題ない」という意味になり、辞書的用法を用いても不自然ではない。

この用例は、芦木(2019)で分類したような、「諾否疑問文に対する拒否」の用法に当てはまる。「いいえ」や「いません」と答えるのではなく、あえて、「大丈夫です」を使うことで、配慮意識が見られる。さらに、「ね」を付けることで、協応的態度を表している。芦木(2019)の調査では、諾否疑問文に対する拒否は、「大丈夫です。」では3番目<sup>(6)</sup>に、「大丈夫ですよ」では2番

目<sup>(7)</sup>に多かった。

## 6. まとめ

本稿では、TWCを用いて「大丈夫ですね」の実例を調査し、使用実態を明らかにした。大まかな調査にはなってしまったが、これは再現性を最優先した結果である。具体的には、神尾（1990、2002）の情報のなわ張り理論を元に、用例を分類した。その結果、再現性が最も保障出来る、任意の「ね」に着目し、該当する用例を前接する形態素ごとに分類し、分析した。

任意の「ね」に該当する用例で、全用例とはっきりした差が見られたのは、「前接なし」の用例である。これは、病院での用例が非常に多く見られ、医師が患者に対して協応的態度を表す必要から、このような結果になったと思われる。

また、副詞「全然」も、はっきりした差が見られた。これも、「全然大丈夫（問題ない）」ということ聞き手に示す、協応的態度の表れと思われる。

さらに、諾否疑問文に対する否定のような、辞書的用法からやや外れた用例も確認出来た。

TWCを用いた実態調査は、使用の拡大が指摘され続けている「大丈夫」を、客観的に分析している。実際にどのような用法が多く用いられているのかを把握することは、研究意義があると言えよう。今後は、「大丈夫ですよ」の分析や、「大丈夫ですよ」と「大丈夫ですね」の比較検討などを行い、「大丈夫」が用いられている現状を概観したい。さらに、将来的な展望としては、使用頻度の高い場面やコロケーションの明確化を通じて、日本語教育への応用にも繋げていきたい。

## 注

- (1) 芦木（2019：154）
- (2) 表1において、割合は、小数点以下第3位を四捨五入して記した。
- (3) 「も」9例、「から」6例、「たら」「全然」各5例、「が」4例、名詞3例、「と」「きっと」「まだ」「限り」「うん」各2例、「し」「て」「とも」「から」「でも（接続詞）」「じゃあ」「通常」「しばらく」「当分」「ほとんど」「ほぼ」「まず」「まで」「もちろん」「よく」「割と」「ない（補助形容詞）」動詞各1例、計60例である。
- (4) 表2において、割合は、小数点以下第3位を四捨五入して記した。
- (5) 「も」「と」「から」「ほとんど」「限り」「当分」「しばらく」「ほぼ」「ない」「うん」、計10例である。

(6) 用例数は、全 1307 例中 237 例であった。

(7) 用例数は、全 184 例中 22 例であった。

## 使用コーパス

『筑波ウェブコーパス』(Tsukuba Web Corpus : TWC)

検索ツールとして、筑波大学・国立国語研究所・Lago 言語研究所『NINJAL-LWP for TWC』(<http://nlt.tsukuba.lagoinst.info>)を使用した。

## 参考文献

- 芦木亜彩湖 (2019) 「ウェブコーパスを用いた『大丈夫です』の使用に関する実態調査 — 勧誘に対する拒否としての『大丈夫です』 —」『実践国文学』96 : 144-166
- 岩畑貴弘 (2009) 「日本語の終助詞『ね』を通してみる『共有』と『コミュニケーション』について (1)」『人文研究』167 : 51-114
- 岩畑貴弘 (2009) 「日本語の終助詞『ね』を通してみる『共有』と『コミュニケーション』について (2)」『人文研究』168 : 79-111
- 遠藤李華 (2020) 「『大丈夫』のコミュニケーション上の特質 — 語用論の観点からの分析 —」『創価大学大学院紀要』41 : 319-342
- 大曾美恵子 (1986) 「誤用分析 1 『今日はいい天気ですね。』 - 『はい、そうです』」『日本語学』5 (9) : 91-94
- 尾崎喜光 (2016) 「『大丈夫です』の用法の拡大に関する研究—不利益を想定して気遣う言語行動—」『清心語文』18 : 52-64
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論 言語の機能的分析』大修館書店
- 神尾昭雄 (2002) 『続・情報のなわ張り理論』大修館書店
- 川口良 (2017) 「若者ことばに見る (間) 主観化について—『大丈夫』の新用法に注目して—」『文教大学文学部紀要』31 (1) : 37-57
- 顔暁冬 (2013) 「中国における日本語教育の現状と分析: 日本語終助詞「よ」「ね」「よね」の扱い方を中心に」『言語文化論究』30 : 39-53
- 菊池律之 (2018) 「日本語母語話者と日本語学習者の使用表現の差異の分析: 日本語教育への応用のために—「大丈夫です」「～ぐらい」「かぶる」を中心に—」『天理大学学報 語学・文学・人文・社会・自然編』69-02 : 1-15
- 北野浩章 (1993) 「日本語の終助詞『ね』の持つ基本的な機能について」『言語学研究』12 : 73-88
- 西郷英樹 (2012) 「終助詞『ね』『よ』『よね』の発話連鎖効力に関する一考察: 談話完成タスク結果を基に」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』22 : 97-118
- 城田麻里子 (2007) 「『大丈夫』の用法の変化について」『東京女子大学言語文化研究』

16：103-109

- 砂川有里子（2005）「コーヒーで大丈夫ですか？」北原保雄編『続弾！問題な日本語』28-31 大修館書店
- 高橋宗一郎・竹下浩子（2014）「若者言葉から見る配慮とは—「大丈夫」についての考察—」『日本語教育と日本研究における双方向性アプローチの実践と可能性 第9回国際日本語教育・日本研究シンポジウム大会論文集』433-443 ココ出版
- 朴美貞（2018）「終助詞『ね』の習得に関する研究概観—自由会話と空白埋めテストの結果に焦点を当てて—」『昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究』12：15-29
- 蓮沼昭子（1988）「続・日本語ワンポイントレッスン・第2回」『言語』17（6）：94-95
- 福島和郎・岩崎庸男・渋谷昌三（2008）「終助詞“よ”と“ね”の発話が発話者の印象に及ぼす効果」『目白大学心理学研究』4：75-84
- 益岡隆志・田窪行則（1989）『基礎日本語文法』くろしお出版
- 山内博之（2009）『プロフィシエンシーから見た日本語教育文法』ひつじ書房
- 山下早代子（2013）「今どきの『大丈夫です』—その使用実態～『大丈夫です』は若者ことばか？～」『明海日本語』18：285-312
- ラヒムバエヴァ・ナジム（2017）「初級日本語学習者における終助詞「ね」の習得：カザフスタンの学習者を対象に」『日本語・日本文化研究』27：160-169

（あしき あやこ・実践女子大学大学院 平成30年度修了）